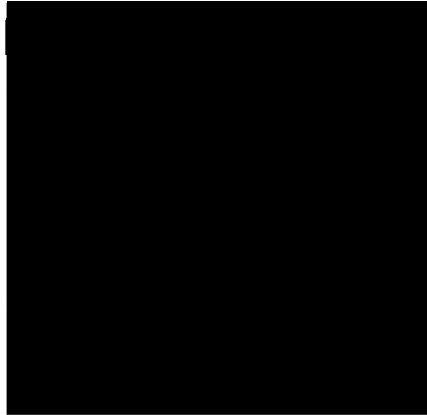


◆前号の訂正
 9 ページ上段7行目
 高盛↓隆盛
 51 ページ下段7行目
 高盤こうばん(火あぶり) ↓(高所にうがつた防禦陣地)



◆表紙解説

「弥生須平瓦製庚申塔」撮影吉田勝重

佐伯管内で最も古い庚申塔は西野地藏本にある天正四年(一五七六)のもので、「奉造立庚申待人数講也」と、近隣集落の講衆十八名の戒名が刻まれ、常楽寺住僧三名の先導によって造立された。

江戸時代には五穀豊穡を願う民間信仰として広まり、神道では「猿田彦命」仏式では「青面金剛」として多様な石造庚申塔が建立され、堅田地域では昭和初期(戦前)まで続いている。

須平の瓦製庚申塔は文化十四年(一八一七)地元の瓦師長蔵によって制作され、瓦製の厨子の中に瓦製の青面金



剛像が収められている。石造とは異なり精緻な細工が可能で金剛や脇侍、邪鬼・三猿等の表情が豊かでユーモラスである。

江戸後期、瓦師長蔵は佐伯藩の御用瓦師として活躍、三の丸御殿や御浜御殿(現独歩館)の鬼瓦に「佐伯切畑村瓦師長蔵」の刻印を残している。



7 佐伯切畑村瓦師長蔵



独歩館鬼瓦